

2022年10月20日

琉球新報社編集局長 島 洋子殿
編集局報道本部暮らし報道グループ 高江洲洋子殿

永津禎三

貴社の2022年9月28日付〈「大龍柱」永津氏寄稿について〉、安里進「論争ゆがめる誹謗中傷」及び「経緯」の掲載について嚴重に抗議し、善処を求めます。

私の「応答原稿」掲載は拒否し、このような事実誤認の記事を掲載するのは、一方的で、まさに私の名誉を傷つける行為です。

安里進「論争ゆがめる誹謗中傷」では、「永津禎三氏が… …誹謗中傷文を寄稿した」としている。

私が寄稿した〈首里城大龍柱 技術検討委への指摘 上・下〉琉球新報(2022年3月15日, 16日)は断じて「誹謗中傷文」でない。安里氏報告書の記述内容の誤りを論理的に指摘したものである。

「戦前大龍柱は欄干に連結していたのかー西村説の検証」の中で、安里氏の論証は「吽形大龍柱のトグロ巻きの展開図」を根拠に「戦前大龍柱(吽形)のトグロ巻部背面にホゾ穴や無彫刻部分が存在しないという事実」を明らかにしようとする、実に回りくどい奇妙な手順であった。さらに、その「展開図」の「背面」とするところは二つの写真が合成されていた。

二つの写真を合成した「展開図」を作成しこれを根拠とするのは異常な手順・方法であり、データの改竄、捏造報告に当たると論証しようとしたものである。

ただし、その論証は、昭和の大改修の時にトグロ巻部が動かされていなかったという前提のものであった。

これに対して、安里氏からの反論「ホゾ穴と正面向き復元 検証・首里城大龍柱」が琉球新報に6月1日, 2日に掲載され、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の写真(以下「新資料写真」と略)が公開された。

この写真で昭和の沖縄神社拝殿への改修の時、吽形大龍柱のトグロ巻部の背面が御庭側に向けられたことが初めて明らかになった。

「新資料写真」により、トグロ巻部の向きについての私の認識の誤りが明白になり、これにより告発時の論証が成り立たなくなったため、沖縄総合事務局と沖縄県立芸術大学に提出していた「研究上の不正行為」の告発を取り下げたのである。

安里進「論争ゆがめる誹謗中傷」には、このことを、〈ところが、6月1・2日の本紙で私が永津氏の論理矛盾を指摘すると、永津氏は沖縄総合事務局に「私の見解が誤りであった」とわび状を送り「捏造」は間違いだったと認めた。沖縄県立芸術大学と琉球新報社にも同様なおわびを伝えたようだ。〉と書いている。

私は、〈「捏造」は間違いだったと認めたわび状〉など送っていない。これは事実でない。

「不正行為告発の取り下げについて」という文書名で次のような文面の文書を送ったというのが事実である。

「不正行為告発の取り下げについて」（2022年6月3日付）

令和4年4月3日付「首里城復元に向けた技術検討委員会の不正行為について」につきましては、6月1日、2日琉球新報紙掲載の安里進「ホゾ穴と正面向き復元 検証・首里城大龍柱」の掲載写真「写真1」により、私の見解が誤りであったことが明白になりましたので、これをお詫びし、取り下げさせていただきます。

9月27日13:46から55分間、貴社の高江洲洋子氏は、私に「経緯」記事掲載連絡の電話をし、そこで「安里氏に謝罪はしないのですか」と訊ねた。

これまで高江洲氏には何度も「応答原稿」の説明をしてきたのに、意味不明な質問だった。

高江洲氏には、6月2日以降、何度も安里氏の反論に対して「応答原稿」を寄稿するので掲載して欲しいとお願いしている。

6月24日のメールでの質問〈永津先生が、「捏造」「不正行為」と判断したことのお詫びを読者に伝えたい、とのことですが、永津先生の寄稿のどの記述・見解について、そうお考えなのか教えていただけますか?〉に対して、次のように返信した。

〈私の誤りは、昭和の大修理（沖縄神社拝殿への改修）の時、トグロ巻部が180度向きを変えられていた事実の認識を欠如していたことです。

これについては、最初の6月2日のメールに記していたつもりです。

安里氏の報告書について、論証の手法・手順に違和感を感じ、「大龍柱のトグロ巻展開図」をデータ改竄とし、この報告を捏造と論じたことについて、「写真1」（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵）により、これが誤りであったことが明白になりましたので、お詫びしたいということです。〉

7月5日には出来上がった応答原稿「研究者としての矜持を」を送り、7月16日次のように返信いただいたので、直接の面談を希望した。

〈大龍柱のトグロ巻部をめぐる永津先生の見解に誤りがあったという点です。この誤った見解のまま、永津先生がご自身の寄稿で、安里先生の報告を「ねつ造」「不正行為」と書いたことを私どもは、重く捉えています。

この件、編集局三役と共通認識です。

よっぽどの根拠がないと「ねつ造」という表現は避けるべきでしたし、このような表現のある原稿を掲載してしまった、私どもに掲載責任はあります。

ただ、メールでかくと、どうしても私どもの考えや十分に伝えられないので、週明け以降に一度、お電話でやりとりさせていただければ有り難いです。わたしから電話差し上げたいのですが、永津先生のご都合を2、3お聞かせ下さいますか。〉

7月22日11時から1時間ほど面談し、そこでも、安里氏の不正行為の疑いはまだ晴れていないことを伝えているのに、9月27日の「安里氏に謝罪はしないのですか」の質問は意外だったが、電話でも丁寧の説明した。

翌9月28日の貴紙を見て、安里氏の「論争ゆがめる誹謗中傷」に付す形で高江洲氏が〈「大龍柱」永津氏寄稿について〉と「経緯」を書いていたのに驚き、次のようなメールを送った。

永津禎三です。昨日はご連絡ありがとうございます。安里氏自身の「誹謗中傷」コラムに付す形で「経緯」を載せるということだったのですね。

この形ですと、安里氏の主張を認めた上での「経緯」となります。

私は、沖縄総合事務局や沖縄県立芸術大学に告発を取り下げる文書を送りましたが、〈「捏造」は間違いだった〉と言っていない【資料添付】。

このことは、昨日もお電話で丁寧にご説明したはずです。

安里氏の「誹謗中傷」コラムは事実とは異なり、これを掲載されたことに対して、強く抗議いたします。

これに対しての高江洲氏からの返信

こんにちは。昨日は外出直前のお忙しい中、お時間頂戴してしまい失礼しました。

今朝の「経緯」では、トグロ巻部展開図に関連し、大龍柱のトグロ巻の回転について、永津先生が先だっの寄稿で誤認して安里先生の展開図を「ねつ造」と批判していた、とあくまで説明しております。

永津先生が〈「捏造」は間違いだった〉と言っていない、のはこちらも認識しています。ご確認のほど、何卒よろしくお願い致します。

抗議の趣旨を理解していただけなかったようなので、さらに返信

永津禎三です。

安里氏の記述には、〈永津氏は沖縄総合事務局に「私の見解が誤りであった」とわび状を送り「捏造」は間違いだったと認めた〉とあります。

〈「捏造」は間違いだったと認めた〉ということは事実と反することを承知しながら、この記事をそのまま掲載したことに、嚴重に抗議しているのです。

私の原稿掲載は拒否し、このような事実誤認の記事を掲載するのは、一方的で、まさに私の名誉を傷つける行為です。

編集局長も同席いただき、話し合いの場を設定していただきたいと思っています。

安里氏の実事誤認を事実誤認と知りながら掲載したという問題の他に次の2点を抗議します。

■ 〈「大龍柱」永津氏寄稿について〉記事中の「相手の名誉を傷つけるような表現がありました」

はじめに述べたように、私はこれを「相手の名誉を傷つける表現」とは認識していない。私の論証はトグロ巻部の向きについて認識の間違ひはあったが、これが判明したのは安里氏の反論の「新資料写真」が出てきたからである。

高江洲氏は、西村貞雄『首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察』92ページの記述、「胴体部を無くした大龍柱は、下部の巻き付け部分が1/4回転ずらした状態で据え付けられ、坂本万七の阿形の後面写真（写真⑦）の下部巻き付け部分は、本来は右側面に当たる箇所である。」で、「トグロ巻部が180度向きを変えられていたことは明白」と主張するが、この記述はそこまで明解なものではない。

私は、正面向きから相対向きに変えるとき、「トグロ巻部」まで手を加える必要がなく、頭部胴部のみを90度回したものと思いついていた。そのような思い込みで西村氏の論文を読んだので、「本来は右側面に当たる箇所である」の右側面を大龍柱に向かい合わせに立った時の右側と誤読していた。

それでは、これを正しく読んでいたら、吽形の方も同様であると考えたでしょうか。阿形のトグロ巻部が180度回転されていた理由が全くわからない以上、吽形の方も同様であるとは言えない。

繰り返しになるが、トグロ巻部が180度回転する合理的な理由は無いのである。頭部胴部に合わせた向きでもなく、台石から外して別の向きに固定し直すのは手間がかかるだけで、構造的にも強度が落ちるだけである。トグロ巻部は動かさないという方が自然な考えである。

阿形の方は、熊本鎮台沖縄分遣隊によってへし折られているので、そのときに生じた基底部の損傷が原因で不安定になった強度を修復するのに、たまたま180度向きを変えて安定したという推論も成り立つ。阿形、吽形が共に180度トグロ巻部を回転された理由は不明のままである。

そして、この自然な考えと異なる事実が「新資料写真」で明らかになったという流れである。

安里氏は、この「新資料写真」を初めから（手を加えないオリジナルな形で）見ていたのだから分かるであろうが、私を始め読者は、安里氏の示した加工された写真で判断するしかなかったのであるから、結果的に論証の根拠は失われたが、論証の時点で「相手の名誉を傷つけるような表現」はしていないのである。

■「経緯」の〈「ねつ造」「不正行為そのもの」と強く批判しました〉

私の寄稿した〈首里城大龍柱 技術検討委への指摘 上・下〉琉球新報(2022年3月15日, 16日)が、この形になるまで、何度も交渉を行ったことを高江洲氏はお忘れなのだろうか。

この寄稿論考では「捏造」についての記述は〈残念なことだが、安里氏の今回の報告は「捏造」と言われても仕方のないものなのである〉であり、「不正行為そのもの」についての記述は〈もしも、このまま実施されれば、これはもう不正行為そのものである〉である。

最初に私がお渡しした原稿から、何度も交渉があり、「強く」ない表現に落ち着いたはずだ。それを〈強く批判しました〉と書いた意図とは何か。

そして安里氏が「誹謗中傷文」と書いたものをそのまま掲載した意図は何か。

琉球新報社は、私にしっかりとこれらのことを説明し、善処する責任がある。